多賀台小

自分の考えをもち、進んで表現する子の育成

～児童の思考に寄り添い、学び合う授業づくりを通して～

（３年計画の３年次）

校長　　竹　花　剛　二

１　研究主題について

本校では、教育目標として「心豊かに　たくましく」、努力目標として「進んで学ぶ子」「思いやりのある子」「体をきたえる子」を掲げ、物事を自分事として捉えたり、相手の立場になって考えたりする思考法を用いて行動できる児童、物事を関連付けて考えることができる児童の育成を目指している。

昨年度は、「児童が思考したくなる学習課題の設定」「深い学びにつながる対話の工夫」「自己の学びを確かめる振り返り」についての研究を進めてきた。児童が思考したくなるような学習課題設定を行うことにより、解決の必然性や意欲を引き出すことができた。また自分の立場を明らかにすることで、自分事として課題を捉える児童が増え、主体的に学習に取り組むことができるようになってきた。しかし、考えや意見を交流することによって、更によりよい考えや意見をつくり上げるまでには至らず、対話を通して深い学びにつなげていくことに課題が残った。

そこで、これらの成果と課題から、今年度は「児童の思考過程を大切にした授業づくり」を土台とし、児童の思考に寄り添い、学び合う授業づくりの研究を進めていく。そのために、まずは児童が自分の考えを可視化することができる手立てを講じ、互いの立場を明確にすることで、児童が問題解決に向けて必要感や切実感をもつことができるようにしたい。次に、深い学びにつながる対話の工夫をする。ペアやグループなどの形態や１人１台端末を活用する方法など伝え合う場を工夫したり、話合いの観点や目的など視点を明確にしたりする。その際に、理由や相違点を問うなど思考を深める発問を投げかけ、対話を通して深い学びにつながる授業を展開することにより、児童に「わかった！できた！身についた！」を実感させたいと考える。

２　研究のねらい

児童の思考に寄り添い、児童同士が互いに学び合うことを意識した授業づくりを行うことが、自分の考えをもち、進んで表現する子の育成に有効であるということを授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

児童の思考に寄り添い、学び合う授業づくりをしていくために、自分の考えを可視化できるような手立てを講じ、互いの立場を明確にする。そして、伝え合う場を工夫したり話合いの視点を明確にしたりすることや、思考を深める発問を投げかけるなど、対話を通して深い学びにつながる授業を展開することにより、自分の考えをもち、進んで表現する子を育成できる。

４　研究内容

(1) 自分の考えを可視化する手立て

(2) 深い学びにつながる対話の工夫

　ア　伝え合う場の工夫

　イ　話合いの視点の明確化

　ウ　思考を深める発問

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師
7	18	授業公開（６学年）福士　貴人　社会「貴族のくらし」
9	27	教育指導課・総合教育センター訪問（計画訪問）
9	28	第１回授業研究（要請訪問）２学年　久保田　遥　国語「お手紙」 講師：八戸市教育委員会　教育指導課　主任指導主事　中村　美穂　氏
11	1	授業公開（１学年）吉田　彰子　国語「じどう車くらべ」
11	13	授業公開（わかば）伊藤　直子　外国語「Unit6 Let's think about our food.」（６学年）
11	14	授業公開（３学年）類家　直人　理科「音を出して調べよう」
11	15	授業公開（すずかけ）寺下　真彩子 国語「慣用句」（６学年）　「ともだちのこと、しらせよう」（１学年）
11	22	第２回授業研究（要請訪問）６学年　Ｔ１佐々木　禅　Ｔ２福士　貴人 算数「比例と反比例」 講師：三八教育事務所　教育課　指導主事　前川原　泉音　氏
11	27	授業公開（４学年）河原木　直美　国語「プラタナスの木」
11	30	授業公開（５学年）児玉　友絵　社会「工業生産を支える輸送と貿易」

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
5	31	学力検査（ＣＲＴ）の分析・考察
6	28	水遊び・水泳運動についての研修　講師：本校教諭　類家　直人
7	5	プール監視・安全指導についての研修
8	22	特別支援研修　「『困り』の理解と支援について」 講師：八戸市教育委員会　こども支援センター　指導主事　川野輪　美穂　氏
8	30	県学習状況調査の採点・分析・考察
9	6	版画講習会　講師：本校教頭　種子　麻佐子
10	25	１人１台端末の活用　講師：本校教諭　吉田　彰子　福士　貴人
12	6	全国学力・学習状況調査の分析・考察
2	21	県外研修報告会「筑波大学附属小学校初等教育研究会」「全国養護教諭連絡協議会」

６　研究の成果

(1) 自分の考えを可視化する手立てを講じたことにより、他者との類似点や相違点から互いの立場が明らかになり、課題解決への必要感が生じ、解決に向けて意欲をもって取り組むことができるようになった。

(2) ペアやグループなど目的に応じた話し合う場の工夫や視点を明確にした話合い、問い返しやゆさぶる発問などの工夫を重ねたことにより、対話的な学びが生まれ問題解決に向かわせることができた。

７　研究の課題

(1) 対話的な学びを促すことはできたが、考えを深めることには課題が残った。深い学びに繋げるために、互いの考えを比べながら聞き、考えを整理したり根拠をもって話したりする力をつけていく必要がある。

(2) 児童同士の関わりから学びが深まり、「わかった！できた！身についた！」が実感できる授業を展開するために、教師の働きかけを更に工夫する必要がある。

（記入者　児玉　友絵）